

今後の人文学・社会科学のモニタリング実施に係る方向性

人文学・社会科学特別委員会が2023年2月にとりまとめた「人文学・社会科学の研究成果のモニタリング指標について（とりまとめ）」を踏まえて、以下の通り、モニタリングの実施及び更なる指標の開発を推進。

資料3

科学技術・学術審議会 学術分科会
人文学・社会科学特別委員会（第21回）
令和6年1月26日

モニタリングの実施内容

書籍分析（単著、共著、章論文）

研究成果の総数やサブカテゴリーごとの量、研究テーマの動向や傾向、引用される論文数や書籍数の把握等を実施

国際ジャーナル論文分析

研究者ヒアリングを通じて対象範囲を整理し、総論文数や、サブカテゴリーごとの論文数を把握する。

※それぞれの作業状況を共有しつつ、研究成果の総合的な把握を進める

国内ジャーナル論文分析

総論文数やサブカテゴリーごとの論文数を把握する。

更なる指標の開発

- 現在の社会の動向に応じた様々な研究活動をはじめとする**社会的インパクト**の検討
- 被引用数とは異なる形で研究成果物の影響度を指標化する**Altmetrics等の新たな指標**の活用可能性を検討

…このほか、目録・索引作成やデータベース構築等の**研究基盤整備への貢献等に対する新たな指標**の検討等

定期的に科学技術・学術審議会学術分科会等において、分析結果・検討結果を報告

令和8年度以降上記の成果を踏まえつつ、以下の取組を推進する

- モニタリングの実施により、これまで正確に把握されていなかった、日本の人文学・社会科学の研究成果の全体像を可視化し、その結果を研究力のトレンドやマクロの分析に活用する。
- 社会的インパクトや新たな指標の検討結果を、人文学・社会科学の研究成果の把握への活用。

人文学・社会科学の研究成果の可視化・計画的振興・社会還元・国際発信への活用

人社の知による我が国の研究力の向上
若手研究者の計画的・戦略的な育成

「人文学・社会科学の研究成果のモニタリング指標について」

(令和5年2月7日 科学技術・学術審議会 学術分科会 人文学・社会科学特別委員会)

- 人文学・社会科学の総合的・計画的振興及び国民の理解増進の観点から、研究活動を可視化・発信することは重要
- 分野の多様性と特性を踏まえ、5つの研究力の柱の観点から設定した研究成果に関連する指標についてモニタリングを実施すべき

検討の経緯・方向性

- 令和2年に科学技術・イノベーション基本法が成立したことを受けて、第6期科学技術・イノベーション基本計画（令和3年3月閣議決定）において、「人文・社会科学（略）に関連する指標について2022年度までに検討を行い、2023年度以降モニタリングを実施する」と記載
- これまでの各方面での検討状況や基本法改正の趣旨、分野の多様性と特性を踏まえ、**研究評価指標ではなく、我が国全体の人文学・社会科学の研究活動を可視化することを目的とする研究成果に関連するモニタリング指標について検討を実施**

モニタリングの目的・方針

【目的】 学術及び科学技術の観点から、我が国全体の人文学・社会科学の研究活動を可視化・発信することで、以下の実現を目指す

- モニタリング結果を活用した人文学・社会科学の総合的・計画的振興
- 人文学・社会科学に対する国民の理解増進
- ※ 個別の大学や研究者の評価においては、ピアレビューを基本とするべきであり、定量的評価はその支援に用いるべきである点に留意が必要

【方針】 内閣府CSTIにおいて行われている「研究力を多角的に分析・評価する新たな指標の開発について」で挙げられている3つの研究力の柱に、人文学・社会科学の特性を踏まえた研究力の柱を加えた、5つの研究力の柱の観点から、指標を設定し、モニタリングを実施

目指す姿

- 人文学・社会科学の厚みのある知の蓄積
- 総合知の創出・活用

目標

- 人文学・社会科学分野の研究活動を一定程度可視化し、関連する政策効果の測定を図る

研究力の柱

- 真理を探究、基本原理を解明し、卓越した成果を生み出す力
- 自国の言語で実施できる研究力（補強指標）
- 研究活動の国際化の進展度（補強指標）
- 新領域を開拓し、多様な研究を遂行する力
- イノベーション指向の独創的な新技術を創出する力

アウトプット（具体的成果発表物）及び関連するアウトカムの指標について、2023年度以降モニタリングを実施する

モニタリングする成果発表媒体と指標の方向性

成果発表媒体	現状	今後の方向性
国際ジャーナル論文	<ul style="list-style-type: none"> ○ 一部の分野（経済学、心理学、経営学等）における主要な成果発表媒体 ○ 各データベースで、書誌情報が整理されている 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 以下の指標について、モニタリングを実施 国・地域別の総論文数 ○ 分野別の総論文数、被引用数については、引き続きモニタリング手法を検討
国内ジャーナル論文等	<ul style="list-style-type: none"> ○ 主要な成果発表媒体 ○ 網羅的なデータベースは存在しないが、例えばJ-STAGEでは、書誌情報が整理されている 	<ul style="list-style-type: none"> ○ J-STAGEのデータを基に、以下の指標についてモニタリングを実施 <ul style="list-style-type: none"> ・分野別の総論文数 ・1記事当たり被引用数 ・1記事当たりアクセス数
プレプリント	<ul style="list-style-type: none"> ○ 一部の分野において、投稿が行われている ○ 2022年3月に運用を開始したプレプリントサーバー「Jxiv（ジェイカイク）」への投稿も行われている 	<ul style="list-style-type: none"> ○ プレプリントの考え方については、様々な議論が続いていることなどから、慎重にモニタリング手法を検討する必要がある ○ 当面は、論文指標等で代替
書籍	<ul style="list-style-type: none"> ○ 主要な成果発表媒体だが、研究成果としての書籍の限定や整理されたデータの取得は極めて困難 ○ CiNii Booksや民間データベースなどから、限定的なデータを入手することは考えられる 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 既存の仕組みを活用した限定的なモニタリングを含め、引き続きモニタリング手法を検討する必要がある

上記の成果発表媒体に基づく指標を補完するために、以下の調査結果も参照

- 他分野との連携状況の把握…科学技術の状況に係る総合的意識調査（NISTEP定点調査）等
- 新領域を含む研究動向の把握…NISTEPサイエスマップ調査等

今後の課題

今後の課題としては、**書籍に関するデータの充実、社会的インパクトに関する指標の検討、モニタリングの充実に向けた望まれるデータの測定（研究成果を発表する際の情報の登録など）、国際性の向上、芸術系分野における指標の検討**が挙げられる

人文学・社会科学が先導する未来社会の共創に向けて（審議のまとめ）

（学術分科会 人文学・社会科学振興の在り方に関するワーキンググループ、平成30年12月14日）（抜粋）

- 分野特性による程度の差はあるものの、人文学・社会科学においても広範なデータ収集とそれに基づく分析という計量的な研究手法は一般的なものとなっており、どのようなデータをどれくらい収集するかということは人文学・社会科学の研究成果の質に直結する極めて重要な要素の一つである。また、研究データを利用できるようにすることは人文学・社会科学に限らず重要であるが、人文学・社会科学では研究の前提となる資料やデータを利用可能な状態に整備し、公開する活動が業績として評価されているとの指摘もある。このように、研究活動を支える活動を積極的に評価することは、研究データのデジタル化された利用環境の整備においても有意義である。
- 人文学・社会科学の学術研究における評価に関しては、自然科学と同様に論文数や被引用度などの評価指標が採用されているが、人文学・社会科学においては書籍の刊行もまた重要な成果の発表手段となっている実態がある。また、学術論文については、テーマ自体がそれぞれの国や社会のコンテキストに左右されることもあり、論文が採択されること自体の意味がそれらの違いによって異なる場合もある。さらに、論文が公表されてから引用のピークを迎えるまでの期間が自然科学に比べて長くなるという傾向も有している。このように、研究成果の公表の在り方や評価基準等を標準化するのが難しい人文学・社会科学と自然科学の間では、状況が同一でない側面は考慮されるべきである。もっとも、人文学・社会科学と自然科学の間で共通する評価のあり方もあるので、人文学・社会科学分野での基準を別途設けることでかえって同分野の特異性が強調されすぎることのないよう注意しなければならない。
- 特に国際化促進という観点からの評価に関する課題として、論文のテーマや枠組みが特定の国や社会のコンテキストと独立ではないがゆえに、国際的な発信を行う際には、国内に向けた発信とは異なる配慮が求められることになる。そこに、国際ジャーナルに刊行された論文が直ちに国内的に評価されるわけではない構造が存在する。このような現実には、特に短期間に量的な実績をあげることも期待される若手研究者にとって、国際的な発信が直接的なインセンティブとなりにくい環境を生む危険性がある。この点は、人文学・社会科学分野独自の問題として十分に留意しつつ、学術の国際的な展開が研究水準の向上や新たな知的展開につながる極めて重要なことであるとの認識の下、国際的な発信への評価が適正になされるような学術環境の整備が強く求められる。

リスク社会の克服と知的社会の成熟に向けた人文学及び社会科学の振興について（報告）

（学術分科会、平成24年7月25日）（抜粋）

- 学術研究の評価においては、まず、ピアレビューが基本であり、その際公平さと透明性の確保に努め、創造へ挑戦する研究を積極的に評価するなど、評価を通じて研究活動を鼓舞・奨励し、その活性化を図るという積極的・発展的な観点を重視することが肝要である。
- その上で、レビューの在り方について議論を深めつつ、人文学・社会科学の特性を踏まえて評価の視点を増やしていくことが必要である。例えば、「教養」の形成に資する著書、公開講座、メディア等を通じた様々な成果発信やアウトリーチ活動、漢学や日本学等における索引・目録の作成などの実績を一層積極的に評価することに加え、例えば、日本語希少原典や優れた文学研究の外国語への翻訳、国際共著論文、海外での研究活動等の国際的な活動なども研究活動として評価することが求められる。また、国際学会組織化の活動など、国際的な研究関連の活動への貢献について評価することも視点として重要である。
- 研究を通じた課題解決への貢献を一層推進するためには、新たな領域開拓等を目指す分野間連携の研究が適切に評価される必要があり、当該研究を評価する際は、学問的な水準に加えて、共同研究から生み出される貴重なデータベースの構築等の研究者コミュニティに対する寄与、研究に参加した実務者との研究成果の普及に向けた協力等についても評価することが重要である。これらは、研究成果の発信活動の評価とも考えられるため、実際に研究成果を共有し活用する実務者等からの評価も重要である。なお、適切な評価者の設定については、今後も継続的に検討する必要がある。

人文学及び社会科学の振興について（報告）－「対話」と「実証」を通じた文明基盤形成への道－ （学術分科会、平成21年1月20日）（抜粋）

- 人文学及び社会科学の評価においては、定性的な評価が重要である。これは、（中略）人文学及び社会科学における「歴史における評価」や「社会における評価」の意義、そして、学術誌の査読システムに過度に依存することの問題から、半ば必然的に導き出される結論である。
- ここで問題は、人文学や社会科学の学問的な特性を踏まえた評価システムと評価指標の開発である。評価が求められる昨今の世相にあって、ある程度確立された評価システムと評価指標とを持つ自然科学の評価方法が、人文学及び社会科学の評価にそのまま導入された場合には、人文学及び社会科学の発展に問題が生じる可能性がある。
- おそらく、このような問題を回避するためには、定性的な評価の重要性を確認するとともに、現在、ある程度その役割を果たしている書籍という形での成果発信の方法を積極的にとらえることが必要と考えられる。即ち、人文学や社会科学の場合、書籍という形での研究成果の発信が、このような学術誌の査読システムの弊害を回避するための重要な研究成果の発信方法となる可能性を重く受け止めることが必要なのではないだろうか。もちろん、日本における書籍の刊行には、査読システムが内在されていない。ある意味では、出版社の編集者の勘、即ち、大体の評判を聞いて、この研究者はなかなかの知識人ではないか、といったもので動いている部分があるのは事実である。しかし、先に述べたように、人文学や社会科学の評価は、自然科学のように「アカデミズムによる評価」が「社会における評価」や「歴史における評価」に優越するとは必ずしも言えない。評価軸が多元であることから、評価方法を複合的に用意しておくことが重要なのである。このように、「社会における評価」や「歴史における評価」にさらされるという意味で、書籍の意義を重く受け止めることが必要であろう。人文学や社会科学の場合には、学術誌の査読という「アカデミズムによる評価」、書籍による（アカデミズムの評価も含めた）「社会における評価」のバランスを確保することが重要と考える。